

医療 >>> vol.32
最前線
乳腺甲状腺外科

Report!

乳がんの患者さんに心温かな診療を

by 川崎医科大学附属病院

発症数第一位の乳がん。
二〇〜三〇歳代の若い世代も要注意。
「全国の推計値によると、乳がんは女性のがんとして第一位。年間約六万人が発症しています。ほかのがんと違って若い人がなりやすく、四〇〜六〇歳がピークです。この若い患者さんが多いという特徴は日本、中国、韓国といった東アジアだけに見られる傾向で、原因は分かっています。女性の二四人に一人の割合で発症し、患者数自体も増えています。原因は食事や晩婚化、妊娠出産の減少など、ライフスタイルの変化が要因とも言われています」と語るのは乳腺甲状腺外科の紅林淳一教授。専門医として、これまでに日本乳癌学会奨励賞、第一〇二回日本外科学会総会優秀演題賞を受賞するなど、当分野の第一人者として日々、診療にあたっている。

女性のがんでは発症数第一位の乳がんだが、意外にも死亡者数は五番目。患者の二〇人中七人は再発もなく、通常の生活に復帰している。「乳がんは、早期に適切な治療を施せば「治るがん」と言われています。ちなみに五年生存率は九〇パーセント。予後がよいがんなんです。ただ、がんの発生については要因の五〜一〇パーセントは遺伝と言われています。昨年五月に女優のアンジェリーナ・ジョリーさんが遺伝性乳がんの保因者であり、予防的な乳房切除術と再建手術を受けたことで広く世界の人々に周知されました。家族歴では「親等内、仮に母親が四〇歳で発症したなら、その娘さんは一〇歳早く、三〇歳で検診すること強くお勧めします」と注意を促す。

検診から温存手術、形成まで。数多くの症例に対応。

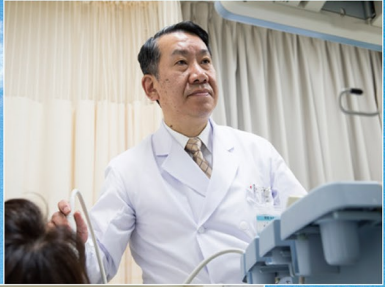
紅林教授が率いる乳腺甲状腺外科は、四〇年余りの歴史を持ち、日本で最も早い時期、一七八七年から乳房温存手術を行なうなど、これまでに多くの症例を手がけてきた。乳房温存手術の実績は、千二〇〇例を超え、乳房内再発は三例（〇・三パーセント）という低い再発率を達成している。またがんが最初に転移する脇の下のリンパ節を調べ、手術中に顕微鏡検査を行ない、転移がなければそれ以上のリンパ節を取らない手術（センチネルリンパ節生検）も導入。この手術は無害なアイソトープと色素法の併用で二〇〇パーセント異常を見つかることができるといふ。「リンパ節をまったく取らないので、腕が腫れるなどの後遺症がありません。過去一〇年間で七割の患者さんはリンパ節を取らずに済みました」。

一九九二年に当院に着任した紅林教授。これまで現病院長の園尾博司氏の薫陶を受けながら、診療研究教育に取り組んできた。「園尾院長の医師としての広い心、患者さんを優しく包み込みながら専門医としての知識と技術を的確に行使する姿は、本当に勉強になります」。

安心と信頼。そして経験豊富なスタッフと先進の機器。今後はカウンセリング体制も整えてさらなるレベルアップを目指したいという紅林教授。当科の進化は続く。

お問合せ

川崎医科大学附属病院
086-462-1111
http://www.kawasaki-u.ac.jp/hospital/



紅林教授が率いる乳腺甲状腺外科には5人の乳腺専門医が在籍。マンモグラフィ制度管理中央委員会の読影認定医・指導医の資格を有している。専門性の高い検診・治療が当科の強みだ。

先進の診断治療機器と治療法で微小がんから難治性の進行がんまで幅広い治療に取り組んでいる当科。皮下乳腺全摘後の乳房形成は形成外科・美容外科の福川喜一教授と協力して行なう。「心温かく、日本で一番よい診療」をモットーに、経験豊富なスタッフが日々、先進医療に挑んでいる。

診療に研究に忙しい毎日をおくる紅林教授。趣味は？「中学、高校、大学と野球をしていました。ポジションは投手。高校の時は東京都の予選で5回戦まで勝ち上がったことがあります。1試合で14奪三振を記録して東京都の投手では5本の指に入ると言われたこともあるんですよ(笑)。進学校で毎年1回戦負けのチームがその時は5回戦進出。今は年に数回ゴルフをするくらいです」。

紅林 淳一 教授
Junichi Kurebayashi
■認定医・専門医・指導医
日本乳癌学会乳癌専門医、
日本内分泌外科学会内分
泌甲状腺外科専門医、日本
外科学会専門医・指導医、
日本がん治療認定機構
暫定教育医
■専門分野
乳癌、甲状腺

